

政
官
財

三本の矢

榊東行

下

Sakaki Toko



江蘇工業學院圖書館
藏書章

三本の矢

榊 東行 画

Sakaki Toko

早川書房

検印廃止

さんぽん
三本の矢 [下]

一九九八年四月三十日 初版発行
一九九八年五月十日 再版発行

著 者 榊 東 行
さかき とし

発行者 早 川 浩

発行所 株式会社 早川書房

郵便番号 一〇一・〇〇四六

東京都千代田区神田多町二ノ二

電話 〇三・三五・三二一(代表)

振替 〇〇一六〇三・四七七九

定価はカバーに表示してあります

© Toko Sakaki

Printed and bound in Japan

印刷・株式会社享有堂印刷所 製本・大口製本印刷株式会社

ISBN4-15-208165-1 C0093

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかいたします。

三
本
の
矢
〔下〕

目次

第四部	変動②	5
第五部	均衡	153
第六部	三本の矢	329
第七部	後夜祭	355
主要参考文献		401

第四部

変 動 ②

平成×年四月二十一日（木）

Throughout the world, governments dominate the economic scene..... Yet the role of government in the world of economic theory is not at all commensurate with this dominance..... As a result, government has not been successfully integrated with private decision-makers in a general equilibrium theory.

（世界中において、政府は経済活動の場を支配している。……それにもかかわらず、経済学理論は、政府活動に対し、その（政府の経済に対する）支配力に応分な役割を与えてこなかった。……結果的に政府活動は、一般均衡理論において、民間行為主体との十分な融合が図られてこなかった）

——アンソニー・ダウンス（米政治経済学者、元スタンフォード大学経済学部教授）

『An Economic Theory of Democracy』

多くの経済専門家は経済的インセンティブ（市場システムが提供する）を推奨する一方で、政治的インセンティブ（民主主義体制が提供する）を無視する。だがそれは極めて不均衡な基本原則を選ぶことを意味する。

政治的インセンティブは経済的インセンティブを補完するために必要である。これが二十世紀の最も重要なメッセージの一つである。これを無視する

ば、私たちが自身が危険にさらされることを覚悟しなければならない。

——アマーテア・シン（ハーヴァード大学経済学部教授）

日本経済新聞「二〇世紀とは何だったか——第六回」

（平成九年九月八日）

早川聡美は、七時ちようどに、議員会館の高田事務所に着いた。案の定、一番乗りである。

もう一度だけ志方を説得しようと思つたからこそ、聡美はこんなにも早起きをしたのだ。志方が来たらすぐに通帳と印鑑を取り上げ、市銀の日本橋支店に持つていく——それが、今朝のプランである。

部屋の電気を点け、コピー機とプリンターの電源をオンにする。

プリンターの横にあるファックス機のトレイには、十数枚もの紙が吐き出されていた。

昨日、聡美が部屋を出た十二時近くの時点では、こんな紙はなかったから、珍しく海外からのファックスかもしれない。

聡美はファックスを手にとると、上端に印字されているページに合わせて順番を整えた。

送信元を示す欄は空白であつた。

何気なく一枚目を読みはじめた聡美は、その内容に思わず息を呑んだ。

ドアをドンドンと叩く音に、紀村ははっと目を醒ました。

——いけない、つい寝込んでしまった。

舌打ちをする。目の前に拡がったコンピュータの画面には、一面にアルファベットのVが連なっていた。どうやら、キーボードに頭を押しつけるようにして寝込んでいたらしい。とすれば、額の一点に残る痺れのような感覚は、Vのキーの仕業か。

ドンドンとドアがまた叩かれる。

「はい」という声が、自分でも驚くほど囁^{ささ}れていた。咳払いをしてもう一度返事をする、紀村はドアを開けた。

「おはようございます」と言いながら、ボーイがポットと紙コップを持って入ってくる。

そうだ、と紀村は思いだした。こうやってつい寝込んでしまったときのための保険に、早朝のルームサーヴィスを頼んでおいたのだ。

とすると――

紀村は時計を見た。予想どおり、針は七時十五分を指している。

まずい、急がなくては。紀村は、ボーイが部屋を出てゆくのも待たずにスーツに着替えると、運ばれ

てきたばかりのポットとコップを袋に入れ、部屋を飛び出した。

予定の七時半に数分遅れて大蔵省三階の会議室に入ると、そこにはすでに官房長の梅野と秘書課長の高橋が座って待っていた。

「やあ、ご苦労さん」

梅野は、紀村が遅れたことを咎めもせず迎へ入れた。

これから毎日、省内の人けが最も少ない早朝に、紀村はこの二人に対して状況報告を行なうことになっていた。

「遅れてすみません。つい居眠りをしてしまったもので——」紀村は正直に言った。「現時点までの進行状況の概要を一枚紙にまとめてお渡ししようと考えていたのですが、それも睡眠の代償となつてしまいました」

「いや、口頭で教えてくれればいいんだよ」笑いながら高橋が言う。

二人が妙に下手に出てきていることは、紀村にとってよいサインではなかった。それだけ自分のへばな捜査に期待を抱かれている証拠だ。ホテルから持ってきたコーヒーを三人分注ぐと、二人の幻想を早めに断ち切るためにさつそく報告を始めることにする。

まずは、物証面——

最初に紀村は、考えられる犯行時刻とその根拠を述べた。そして、安居の証言は信頼性に欠けること、村木はシロの可能性が高いこと……。

村木はシロと聞いてホッとした様子の高橋が訊いてきた。「警備員には何も訊かなかったのか」

「ですから、安居には——」

「いや、安居は警備員でなく用務員だ」

「えつ、用務員以外に警備員もいるんですか？」紀村は呆氣にとられて訊いた。

高橋は苦笑しながら、「そうだ。住専の騒ぎがあつて以来、警備会社に委託して省内を見回つてもらっている。特に夜は何回も回っているはずだから、彼らから、何らかの手がかりを掴めるかもしれない」

「世の中だんだんややこしくなつてきますね」と言いながら、紀村は手帳に「警備員に訊くこと」と書き込んだ。

「物証面での進展は、今のところ以上です。要は、それなりの進展はしたもの、決定的なものは何ら掴み得ていないということです」

次は、いよいよ動機――

ここで大芝居を打つことに紀村は決めていた。段取りは、大蔵省に向かうタクシーのなかで考えてあ

る。
「演繹面、つまり動機についてですが、現時点では、何が動機で誰が答弁を差し替えるという大胆な行為に出たのか、まったくもってはつきりしません」

心なしか、二人に落胆の表情が走る。紀村はそこで、もったいぶった口調で付け加えた。

「しかし、そういう動機を持つかもしれないという候補者はいます」

「誰だ？」高橋がすかさず聞き返す。

「たとえば――」紀村はそこで間をおくと、おもむろに言った。「産金です」

「産金？」意外そうな声。

芝居のクライマックスが訪れた。ここぞとばかりに紀村は力を込めて言った。

「そうです。なぜなら、産金と動金との間では、合併話が進行していたからです」

高橋が、「えつ、合併！」と大きな声を出した。が、隣の梅野の表情はあまり動かない。

それを見た紀村は、自分の推論が正しかったことを悟った。それから、芝居の目的が達せられたということも――。

「確かに悪戯にしては、よくできすぎていますね」

送られてきたファックスのコピーを読んだ佐野が言った。

大蔵省銀行局作成の対応案。

ファックスには、真偽は別として、その詳細なるものが延々と記述されていた。さらに、それに続く部分では、案の妥当性についての経済理論的な説明が加えられるとともに、案を大蔵省内で止めている主計局への批判が滔々^{とうとう}と述べられている。

「昨日の関東新聞ですつば抜かれていたものほとんど同じだ」と高田が得意げに言った。

「それが——」と言いながら、聡美は横から新聞を差し出した。「今日の朝刊では、日々新聞と毎朝新聞にも似たような内容のものがすつば抜かれています」

聡美は、該当箇所を高田と佐野に指し示した。そこには『大蔵対応案の骨子』なるものが掲載されていた。

「同じ内容だ」ファックスと新聞とを見比べた佐野が言った。「ここにファックスを送ってきたやつのは、仕事としか思えませんか。新聞社にも匿名でこのファックスを送ったにちがいない」

「いやー、関東新聞ならわからないけど、日々や毎朝が情報源を確認せずに記事にするかなあ」

「まあ、それもそうですな」佐野は珍しく素直にうなずいた。「とすると、やはり銀行局の連中が外部の支援を求めるため、情報源の秘匿を条件に、対応案を記者陣にリークしているということですかね」
「銀行局とは限らないけど、これだけ具体的な内容が出ている以上、大蔵省の誰かと見るのが妥当じゃないかな」

「よし。このファックスの要請に応えて、議員立案でもしましょうか？」

相変わらず佐野は積極的である。「この案が大蔵省内で止められて一步も外に出れないとなると、大蔵省から案が党に上がってくるのを待っているのは手遅れになってしまいかもしれません」

高田が首を振った。「しかし、議員立案をするにしても、結局大蔵省の助けを借りることになる。これはあまりことを荒立てないほうが賢明だ」

高田の言っていることは、悔しいながらもつともであつた。

たとえ議員立法や議員立案であつても、官僚の助けを借りずにそれらを国会に提出することは、この日本において、ほぼ不可能なのだ――。

日本の政策過程の最大の特色は、実際に施行される法律や政策の大半が官僚提案のものであるという点にある。官僚が作成した法律や政策を、与党や国会がただ承認する――それが日本における政策決定の通常の流れである。数字で言えば、官僚提出の法律が施行される法律全体に占める割合は、なんと七割以上にものぼっている。これに対し、アメリカでは施行される法律のおよそ九割は、議員自らがスタッフとともに作成した、いわゆる議員立法である。

もちろん、日本においても、議員立法や議員立案の政策もわずかながら存在する。だが、それらも例外なしに官僚の助けを受けていた。議員には、立法や政策立案を行なうためのデータも法律知識も時間もないのだ。人材面でも、各議員につき政策秘書は一人しか認められていない。

もしここで、大蔵省の助けを借りずに独自に政策立案を行なうことにすれば、聡美一人で銀行局一局

分くらいの働きをしなければいけないことになる。だが、そんなことはもちろん不可能だ。

高田は的確にその点を指摘した。「佐野君。もしこれが大蔵省の助けを借りずに議員立案するとすれば、君の好きな聡美ちゃんを壊すまで働かなければならなくなるんだよ」

「何をいきなり言うんですか」と佐野は慌てつつも、「——それは確かに困りますね」とトーンを落とした。

「確か、銀行局の紀村君はあと数日内に案が党に上がると言っていたんだよな」

高田は聡美のほうを向き、つい先ほど聡美が報告した内容を再確認した。

「ええ。ただ、『数日内』が、具体的にどのくらいになるかについては言葉を濁していましたが」

「だったらここのは、それが出てくるのを少なくともあと二十四時間は待とうよ。今言った手間の問題以外にも、いろいろと問題はある。たとえば、もしこの案をわれわれの手で提出したら、円城先生などのグループと党を割って争うことになってしまう。それに比べ、大蔵提出の形になれば、事はずつと穏便に運ぶはずだ」

「でも、わが党に上がってくるまで大蔵省内でこの案が生き残れるかどうか……」

「そこはこつちからも、早く案を出せとせつついてみよう。へ金融経済週報の三好さんから聡美ちゃんが聞いた情報によれば、今のところ主計側は省内で対案を出していないようだ。とすれば、早い時期に大蔵が省外に案を出さなければならぬように仕向ければ、大蔵案は自然とこの案に沿ったものになるはずだ」

「主計に対案を作る時間的余裕を与えないようにするわけですね」

「そうそう」

「どうやってせつつきますか？」

「大蔵大臣にでも直訴しようか」